

『古今和歌六帖』の「萬葉連番歌」一覧

池原陽齊

本一覽は、『萬葉集』の本文、加點史、享受などの研究に資することを目的とし、『古今和歌六帖』の「萬葉連番歌」と、その引用元と目される萬葉歌を掲出したものである。

「萬葉連番歌」とは、上田英夫によって『六帖』における萬葉歌の採取環境を探るための基本的な資料と認定された歌群をさす。具体的には、『萬葉集』の排列と同様の順序（ないしは逆順）で『六帖』にとられている萬葉歌のことである。作者名なども一致する場合のおおいことから、連番歌は上田や平井卓郎によって『萬葉集』から直接採取されたことが確実視されている。

その一方で、『六帖』所収の萬葉歌全体については、天曆古点の残影をつたえるものとの見解もあるが、現在では伝誦歌をおおくふくむとの見解も有力で、こういった研究動向を加味すると、位置づけが明確になっていない面もある。

明確にしえない理由としては、『六帖』に中世末期をさかのはる写本がなかったわらないこと、院政期以前の萬葉加點の実

態がつかみがないことなど、いくつかの要因が考えられるが、もっともおおきな理由は、『六帖』所収の萬葉歌が四桁をかぞえ、その全体像の把握が困難であるという点にあるのではないかとおもわれる。

この難点は、迂遠でも逐一の検討をつみ重ねていくことによって解決していくほかないだろう。本一覽はその第一歩である。とくに連番歌については、上田も、上田説を修正した平井も、番号のみを掲出し本文を提示していない。そこで、連番歌の全体像を把握するための材料として、本一覽を作成した。該当歌はもちろん、前後の題詞・左注（萬葉歌）、詞書・作者名表記・注記（六帖歌）についても、参考になるとおもわれる材料についてはすべて掲出した。

まずは上田、平井の認定を参照し、うた番号のみを提示すれば以下のとおりとなる。なお、後掲する一覽自体は『六帖』を基準に排列したので、ここでは『萬葉集』の順序によってならべた。なお、六帖歌と萬葉歌の順序が逆転する場合

には、『六帖』の順序によって逆順とし、その旨を傍線によってしめした。

卷二	一〇七、〇八、二二二、二二三、二二四	二組四首	
卷三	二四三、四二	二組一首	
卷四	六七〇、七一	二組一首	
卷六	九〇八、〇九、九九三、九四	二組四首	
卷七	一一八六、八七	一三〇一、〇二	二組四首
卷八	一四六六、六五	一四七二、七三	
	一五三七、三八	一六二四、二五	四組八首
卷九	一七一八、一九	一組二首	
卷十	一八一五、一六	一八二〇、二一	
	一八七六、七五	一八八〇—八二	
	一九二二、一三	一九一七、一六	
	一九八三、八四	二一六四、四三	
	二二八八、八九	二二三五、三四	
	二三四八、四九	二二五五、五六、五七	
	二二七四、七五	二二二〇、一一	
	二二二三、二四	二三四三、四四	十六組三十四首
	二五四六、四七	二六三七、三五、三六	
	二七五七、五八	二八二二、一三	
卷十一	二八一八、一九	五組十二首	

卷十九	四二三九、四〇	四一四八、四九	
	四一九〇、九一	四一九九、二〇	
	四二〇四、〇五	四二七〇、七一	六組十二首
卷二十	四四五五、五六	一組二首	

なお、ここでは厳密な連番歌のみを掲出したが、ほかにも『六帖』の題にあわせて分載されたことが明確な例や、一番飛ばしで採取されたとおぼしき例も六十程度あり、広義の連番歌は百四十程度と考えられる。紙数の都合で提示することはできなかったが、このような例も『萬葉集』から直接採取された可能性がたかく、六帖所収の萬葉歌の検証にあたっては注目すべき一群である。

ただし、本一覽はあくまでも資料提示を目的とするので、具体的な検証は別途おこないたい。

注

- (一) 上田英夫「古今和歌六帖と萬葉集訓点」(『萬葉集訓点の史的
研究』塙書房・一九五八)
- (二) 平井卓郎「古今和歌六帖と万葉集」(『古今和歌六帖の研究』
明治書院・一九六四、初出一九五八)。なお、河野頼人「春
雨に衣は」から「春雨の心は」へ——『万葉集』卷十の一九
一七番歌にみる異伝発生のある場合——(『万葉研究史の周
辺』和泉書院・一九九二、初出一九九八)のように、連番歌

の直接採取を否定する向きもあるが、稿者は上田らの見方を追認する。具体的な検証に関しては別稿を用意している。

(3) 前掲「上田、山田孝雄」『萬葉集と古今六帖』(『萬葉』第三号・一九五二)など。

(4) 大久保正「古今和歌六帖の萬葉歌について」(『萬葉の伝統』塙書房・一九五七、初出同年)。「六帖」所収の萬葉歌の位置づけについては、福田智子「題と本文の間——『古今和歌六帖』諸本の本文異同と『萬葉集』——」(『同志社国文学』第七十八号・二〇一二)など、近時も議論はおおいが、いまは大筋をしめすにとどめる。

(5) 『六帖』所収の萬葉歌の認定数については、具廷鎬「古今和歌六帖の萬葉歌——萬葉集からの直接採取をめぐって——」(『文化継承論集』第二卷・二〇〇五)が先行説を網羅していて便利である。

(6) 前掲2平井

(7) もっとも顕著な例は、『六帖』第六の三九〇六、〇七と四二八九、九〇で、この二歌群は『萬葉集』卷六の一四六〇〜一四六三までを「つはな」、「かうかの木」という題によって分載したと目される。

(8) たとえば、『六帖』第二の八三二〜三三三は、『萬葉集』の「三三三」―「三三九」―「三三三三」の順で排されている。あるいは卷十一・二七九五〜九八が、『六帖』の題にあわせて分割されている例なども、連番歌に順じる例と考えていいだろう。

【凡例】

・『萬葉集』の本文は『萬葉集CD-ROM版』によった。題詞・左注などについては適宜、句読点等を附し、必要に応じて『校本萬葉集』などに徴して訂正をおこなった。

・『六帖』の本文は「圖書寮叢刊」(底本桂宮本)により、圖書寮本との校合箇所については掲出しなかった。

・うた番号は、いずれも新編国歌大観番号による。

・掲出に際しては、連番歌を一組とし、A〜mの各グループに分類した。掲出に際しては、六帖歌を上段に、それと対応する萬葉歌を下段に排した。

・六帖歌と萬葉歌の対応するうたに、それぞれ1〜83までの番号を掲げた。また、連番歌の前後に『萬葉集』の排列で近接するうた、排列との関係などで注意すべきうたがとられている場合には、それらも一括して掲出した。

・掲出歌の直前、直後に配置されていない題詞(詞書)、左注などについては、()に入れてしめた。なお『六帖』の作者名表記については、およぶ範囲が不明であるため、確実な例以外は提示しなかった。

・『六帖』の連番歌および参考歌以外のうたは省略した。省略する場合には、その歌の番号を【 】に入れて掲出し、あわせて省略歌の『六帖』所収の有無や萬葉歌の番号などを、参照すべき情報を注記した。

『六帖』連番歌

A はるの月

1 朝霞 はるひのくれは このまより いさよふ月を いつ
しかも見ん

2 春くれは はかくれおほき ゆふつくよ おほつかなしも
はなかけにして (第一・二八二、八三)

B みか月

3 つきたちて た、みか月の まゆねかき けなかくこひし
君にあへるらん かもい

4 ふりあふきて みか月見れば ひとめ見し 人のまゆひき
おもほゆるかも (第一・三五一、五二)

C (あめ)

5 春雨の 心は君も しれるらん なぬかしふらは な、よ
こしとや

6 いまさらに 君はなゆきそ 春雨の 心を人の しらさら
なくに [四四六は省略—卷七・一〇九〇]

わかせこを こひてすへなみ 春の雨の ふりわけしらて
出てこしかも (第一・四四三〜四七)

対応萬葉歌

1 朝霞 春日之晩者 従木間 移暦月乎 何時可將待

2 春去者 紀之許能暮之 夕月夜 鬱東無裳 山陰尔指天
一云、春去者 木隠多 暮月夜 (卷十・一八七六、七五)

同坂上郎女初月歌一首

3 月立而 直三日月之 眉根搔 氣長戀之 君尔相有鴨

大伴宿祢家持初月歌一首

4 振仰而 若月見者 一目見之 人乃眉引 所念可聞
(卷六・九九三、九四)

5 春雨尔 衣甚 將通哉 七日四零者 七日不來哉

6 今更 君者伊不往 春雨之 情乎人之 不知有名國

吾背子尔 戀而為便莫 春雨之 零別不知 出來可聞
(卷十・一九一五〜一七)

D しくれ

玉たすき かけぬ時なく わかこふる 時雨しふらは ぬ
れつ、もいかん 【四九〇は省略—非重葉歌】

7 秋たかる たひのそらにて かりほにイ しくれふり わか袖ぬれぬ

ほす人なしに

8 一日にも ちへにしきく はつかしきイ わかこふる いもかあたりに

時雨ふり見ん

(第一・四八九〜九二)

玉手次 不懸時無 吾戀 此具礼志零者 沾乍毛将行

7 秋田苧 客乃廬入尔 四具礼零 我袖沾 干人無一

8 一日 千重敷布 我戀 妹當 為暮零所見

右一首、柿本朝臣人麻呂之歌集出。

(卷十・二二三四〜三六)

E (くも)

9 おほ君は ちとせもまさん 白雲の みふねの山に たゆ
る日あらめや

人まる或本

春日王奉^レ和歌一首

9 王者 千歳二麻佐武 白雲毛 三船乃山尔 絶日安良米也

弓削皇子遊^レ吉野^一時御歌一首

10 たきのうへの みふねの山に みる雲の つねになるへく

も あらぬ我身を

(第一・五一七、一八)

10 瀧上之 三船乃山尔 居雲乃 常将有等 和我不念久尔

或本歌一首

三吉野之 御船乃山尔 立雲之 常将在跡 我思莫苦一

右一首、柿本朝臣人麻呂之歌集出。

(卷三・二四二〜四四)

F (つゆ)

秋萩の さけるをかへの 夕霧に ぬれつ、もませ よは
ふけぬとも

秋芽子之 開散野邊之 暮露尔 沾乍来益 夜者深去鞆

【二二五三は省略—六帖になし】

11 秋萩の うへに置たる しら露の いちしろくしも わか
こひめやも

12 あきのほを しのにをしなへ^み をく露の 消もしなまし
こひつゝあはずは

13 露霜に 衣手ぬれて いまたにも いもかりゆかん よは
ふけぬとも

秋萩の うへにしら露 をくことに 見つゝそしのふ 君
か姿を (第一・五六四〜六八)

G しつく おほともの王子

14 あしひきみの 山のしづくに いもまつと われたちぬれぬ
山のしづくに

かへし 石川女郎^{わうじ}
15 我まつと 君かぬれけん あし引の 山のしづくに なら
ましものを (第一・五八九、九〇)

H (かすみ)

うつくしき いもをおもふと かすみたつ 春日もくれに
恋わたるかな

16 せなかてを まきもく山を このゆふへ このはしのきて
かすみたなひく

11 A 秋芽子之 上尔置有 白露之 消鴨死猿 戀乍不有者
11 B 吾屋前 秋芽子上 置露 市白霜 吾戀目八面

〔六帖歌11はAの上句とBの下句が混在したか〕

12 秋穂乎 之努尔押靡 置露 消鴨死益 戀乍不有者

13 露霜尔 衣袖所沾而 今谷毛 妹許行名 夜者雖深

〔二五八は省略—六帖になし〕

秋芽子之 上尔白露 每置 見管曾思怒布 君之光儀呼
(卷十・二二五二、五五〜五七、五九)

大津皇子贈 石川郎女 御歌一首

14 足日木乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二

石川郎女奉和歌一首

15 吾乎待跡 君之沾計武 足日木能 山之四附二 成益物乎
(卷二・一〇七、〇八)

左丹頬経 妹乎念登 霞立 春日毛晚尔 戀度可毛

16 子等我手乎 卷向山丹 春去者 木葉凌而 霞霏霰

17 かけろふの ゆうさりくれは 里人の 露をきかたに 霞
たなひく

このなかに さよのよろしき あつまのイ あつさ弓 かたやまのへに
霞たなひく

18 たまきはる わかやとのうへに たつかすみ たちてもる
ても 神のまに〜

19 見わたせは かすかのつゝき たつかすみ 見まくのほし
き 君か姿か

【二八・二九は省略——二八は非萬葉歌 二九は巻八・一四三九】
こひつゝも けふはくらしつ かすみたつ あすの春日を
いかてくらさん (第一・六二二〜三〇)

I (ゆき)

20 我せこそ けさかくと いて見れば あは雪ふれる 庭
もほとろに はたらい

21 あしひきの 山にしろきは わかやとに きのふのくれに
ふりし雪かも (第一・七四二、四三)

J (ゆき)

22 わかせこか ことうつくしみ いもゆけは もひきもしろ
す 雪なふりそね 【二八・二七は省略——六帖になし】

23 梅花 それとも見えず ふる雪の いはしろそむな まつ

17 玉蜻 夕去来者 佐豆人之 弓月我高荷 霞霏霰

子等名丹 關之宜 朝妻之 片山木之尔 霞多奈引

18 靈寸春 吾山之於尔 立霞 雖立雖座 君之随意
(卷十・二八二五、一六、一八)

19 見渡者 春日之野邊 立霞 見卷之欲 君之容儀香

戀乍毛 今日者暮都 霞立 明日之春日乎 如何将晚

(卷十・一九一一〜一四)

20 吾背子乎 且今々々 出見者 沫雪零有 庭毛保杼呂尔

21 足引 山尔白者 我屋戸尔 昨日暮 零之雪疑意

(卷十・二二三三、二四)

22 吾背子之 言愛美 出去者 裳引将知 雪勿零

23 梅花 其跡毛不所見 零雪之 市日兼名 間使遣者 一云、

かひやくは

(第一・七五七、五八)

零雪尔 間使遣者 其将知奈

(卷十・二三四三、四四)

K (かりほ)

24 秋はきを かりほにつくり いほりして あるらん君と

24 秋田莉 借廬作 五百人為而 有藍君叫 将見依毛欲得

みるよしもかな

25 たつかねの きこゆるなへに いほりして たひにありき

25 鶴鳴之 所聞田井尔 五百人為而 吾客有跡 於妹告社

と いもにつけなん

(第二・一一二七、二八)

(卷十・三二四八、四九)

L (こたか)

26 す、きのに さをとるき、す いちしるく なきしもなか

26 榎野尔 左乎騰流雉 灼然 啼尔之毛将哭 己母利豆麻可

む こもりつまはも

母

27 あしひきの やまをのき、す なきとよむ あさけのすか

27 足引之 八峯之雉 鳴響 朝開之霞 見者可奈之母

た みればかなしも

(第二・一一八二、八三)

(但此卷中不稱作者名字 徒録年月所処縁起者、皆大伴宿祢家持裁作歌詞也)

(卷十九・四一四八、四九)

M (のへ)

28 春の、の あさちかうへに おもふとち あそへるけふは

28 春日野之 淺茅之上尔 念共 遊今日 忘目八方

わすられめやは

29 春かすみ たつかすか野を たちかへり われはあひみん

29 春霞 立春日野乎 往還 吾者相見 弥年之黄土

いやとしのはに

30 春の、に こ、ろやらむと おもふとち ちきりしけふは

30 春野尔 意将述跡 念共 来之今日者 不晚毛荒梗

くれすもあらなん

(第二・一一二〇七、〇九)

(卷十・一八八〇、八二)

N (のへ)

山のうへのをくら

山上臣憶良詠 秋野花 歌二首

31 秋の、に さきたる花を てを、りて かきかそふれは
な、くさの花

31 秋野尔 咲有花乎 指折 可伎敷者 七種花 其一

32 萩のはな おはななてしこ をみなへし 又藤はかま あ
さかほの花 (第二・二二二二、二二三)

32 芽之花 乎花葛花 瞿麦之花 姫部志 又藤袴 朝白之花
其二 (卷八・一五三七、三八)

O (みゆき) 左大臣たちはなのあそむ

33 むくらはふ いやしきやとも おほきみの みゆきとしら
は たましかましを (みゆき) 右大弁やつか山

(天皇太后共幸 於大納言藤原家之日黄葉澤蘭一株拔取
令持内侍佐々貴山君 遣、賜大納言藤原卿并陪従大
夫等 御歌一首)

34 松かけの きよき河へに たましかは 君きまさんかき
よき河へに (第二・二二二七、二二八)

33 牟具良波布 伊也之伎屋戸母 大皇之 座牟等知者 玉之
可麻思乎 右一首、左大臣橘卿。

34 松影乃 清濱邊尔 玉敷者 君伎麻佐牟可 清濱邊尔
右一首、右大辨藤原八束朝臣。

(卷十九・四二七〇、七二)

P (う)

35 しら川の せをたつねつ、 わかせこは うかはた、せめ
こ、ろなくさに

35 叔羅河 湍乎尋都追 和我勢故波 宇可波多々佐祢 情奈
具左尔

36 うかはたち とり さ、むあゆの したはたえ 我にかき
りに おもひしおもへは (第三・一五〇七、〇八)

36 鷗河立 取左牟安由能 之我波多波 吾等尔可伎无氣 念
之念婆

(但此卷中不_レ稱 作者名字 徒録 年月所処 緑起者、
皆大伴宿祢家持裁作歌詞也)

Q (かはす)

37 せをはやみ をきたちつらし しらなみに かはつ鳴也
朝夕ことに

38 草枕 たびに物おもふ 我きくに ゆふかたかけて なく

かはつかも 【一六〇二省略—非萬葉歌】

秋風に かはつつまよふ ゆふされは ころもてさむし
まくらせんとか (第三・一六〇〇〜〇三)

R (たき)

39 としことに かくもみてしか みよし野の きよきかうち
の 滝のしらなみ

40 やまたかみ しらゆふはなに おちたきつ たきのかふち
は 見れとあかぬかも (第三・一七〇九、一〇)

S あま

41 あひきする あまおとめこか 袖とほり ぬれにしころも
ほせとかはかず

42 あひきする あまとやみらん あきのうらの きよきあら
いそを みにこし我を (第三・一七六六、六七)

37 瀬呼速見 落當知足 白浪尔 河津鳴奈里 朝夕毎

38 草枕 客尔物念 吾聞者 夕片設而 鳴川津可聞

上瀬尔 河津妻呼 暮去者 衣手寒三 妻将 枕跡香

(卷十・二二六三〜六五)

(養老七年癸亥夏五月 幸于芳野離宮 時筭朝臣金村作歌

一首 并短歌)

39 毎年 如是衰見 壮鹿 三吉野乃 清河内之 多藝津白浪

40 山高三 白木綿花 落多藝追 瀧之河内者 雖見不飽香聞

(卷六・九〇八、〇九)

41 朝入為流 海未通女等之 袖通 沾西衣 雖干跡不乾

42 網引為 海子哉見 飽浦 清荒磯 見来吾

(卷七・一一八六、八七)

T (ふね) たかふちのわうし

ある本 ほあしとてイ

43 あし、とてとてイ こき行舟は たかしまの ふしあをのまみちに
つきにける哉ま

つきにける哉ま

44 てる月を くもなかくしそしまかけに 我舟よせん と

まりしらすも (第三・一八〇九、一〇)

U (ゆめ) よみ人しらす ある本

45 わきもこに こひてすへなし しろたへの そてかはしく

は ゆめに見えきや

46 わきもこか そてかへすよの ゆめならし まことまもまきまみ

にあふことありき (第四・二〇三八、三九)

V (さうの思)

47 おもはずに いたらはいもか うれしみと えまんまひき

の おもほゆるかなな

48 かくはかり こひんものとし おもはれば いもかたもと

を まかぬよもありき (第四・二二六二、六三)

W (かなしひ) 人丸

49 おきつなみ よるあらいそを しきたへの 枕にまきて

ふせる いしもかなな

高市歌一首

43 足利思代 滂行舟薄 高嶋之 足速之水門尔 極尔監鴨

春日藏歌一首

44 照月遠 雲莫隱 嶋陰尔 吾船將極 留不知毛

(卷九・二七二八、一九)

45 吾妹兒尔 戀而為便無三 白細布之 袖反之者 夢所見也

46 吾胷子之 袖反夜之 夢有之 真毛君尔 如相有

(卷十一・二八二二、二三)

47 不念丹 到者妹之 歡三跡 咲牟眉曳 所思鴨

48 如是許 將戀物衣常 不念者 妹之手本乎 不纏夜裳有寸

(卷十一・二五四六、四七)

(讀岐狹窄嶋視 石中死人 柿本朝臣人麻呂作歌一首 并

短歌)

49 奥波 来依荒磯乎 色妙乃 枕等卷而 奈世流君香聞

50 かみ山の いはねしまける われをかも しらすていもか
まちつゝをらん (第四・二四四六、四七)

X (せんとう哥)

51 きりくす わかゆかのうへに 鳴つゝあやな おきぬつゝ
君をこふるに いもねかねぬに

52 しのすゝき ほにいてぬ君を われはするも かけろふの
ためとめの みしひとゆへに (第四・二五二四、一五)

Y (人しれぬ)

53 ひとしれす こひはしぬとも いちしろく いろにはいて
し あさかほの花

54 ことにて、いは、ゆゝしみ あさかほの ほにはさき
て、こひをするかな (第五・二六六九、七〇)

Z (人をよお)

55 つきよみの ひかりにきませ あしひきの 山かさなりて
とほからなくに

56 月よみの ひかりはさよく てらせとも こゝろそまとふ
たへぬおもひに (第五・二八四〇、四一)

柿本朝臣人麻呂在石見國臨死時自傷作歌一首

50 鴨山之 磐根之卷有 吾乎鴨 不知等妹之 待乍将有
(卷二・二二二二、二三)

51 蟋蟀之 吾床隔尔 鳴乍本名 起居管 君尔戀尔 宿不勝
尔

52 皮為酢寸 穗庭開不出 戀乎吾為 玉蜻 直一目耳 視之
人故尔 (卷十・二二二〇、一一)

53 展轉 戀者死友 灼然 色庭不出 朝容貞之花

54 言出而 云者忌染 朝貞乃 穗庭開不出 戀為鴨
(卷十・二二七四、七五)

湯原王歌一首

55 月讀之 光二来益 足疾乃 山寸隔而 不遠國
和歌一首 不審作者。

56 月讀之 光者清 雖照有 或情 不堪念
(卷四・六七〇、七二)

a (たまかつら)

さかの上の大姫

坂上大娘秋稻獲贈 大伴宿祢家持歌一首

57 わかほかの わさたのほたち つくりたる かつらそわか
せ しのはせわかせ

やかもち

58 わきもこか はかとつくれる あきのたの はつほのかつ

(第五・三二六二、六三)

58 吾妹兒之 業跡造有 秋田 早穂乃獲 雖見不飽可聞

(卷八・二六二四、二五)

b (たま)

人丸

59 わたつみの てにまきもたる 玉ゆへに いそのをくりを
かつきつる哉

人丸

59 海神 手纏持在 玉故 石浦廻 潜為鴨

60 わたつみの もたるしら玉 みぢくほし みちつけに

(第五・三二九六、九七)

60 海神 持在白玉 見欲 千遍告 潜為海子

(右十五首、柿本朝臣人麻呂之歌集出)

(卷七・二三〇一、〇二)

c (たち)

61 うちなげき はなをそひつる つるきたち 身にそふいも

か おもひくらしも

62 つるきたち 身になそ、ふる ますらをや こひてふもの

は しのひかねつも

63 つるきたち もろはのうへに ゆきふれて みすかんしな

ん こひつ、あらすは

(第五・三四三三、三五)

61 嘸 鼻乎曾嚏鶴 劔刀 身副妹之 思来下

62 劔刀 身尔佩副流 大夫也 戀云物乎 忍金手武

(卷十一・二六三五、三七)

63 劔刀 諸刃之於荷 去觸而 所遺鴨将死 戀管不有者

d (かさ)

64 かきつはた さ、ぬのすけを かさにぬひ きん日をまつ
に としそへにける

65 おしてるや なにはすか、さ をきふるし のちはたかき
ん かさならなくに (第五・三四五六、五七)

e 夏

66 人ことは なつの、くさの しけくとも いもと我とし
たつさはりなは

67 このころの こひのしけくて 夏くさの かりそくれとも
をいしくかこと (第六・三五五〇、五一)

f せり

68 あかねさす ひるはた、にて ぬはたまの よるのいとま
に つめるせりこれ 左大臣たちはなのもろへ

69 ますらをと おもへる物を たちはきて かきはのたゐに
せりそつみける (第六・三八六一、六二)

返事

命婦

64 垣津旗 開沼之菅乎 笠尔縫 将著日乎待尔 年曾经去来

65 臨照 難波菅笠 置古之 後者誰将著 笠有莫國 (卷十一・二八一八、一九)

66 人言者 夏野乃草之 繁友 妹与吾師 携宿者

67 廼者之 戀乃繁久 夏草乃 苜掃友 生布如 (卷十一・一九八三、八四)

天平元年班田之時使葛城王從山背國贈薩妙觀命婦
等所歌一首 副芹子迴。

68 安可祢左須 比流波多々婢豆 奴婆多麻乃 欲流乃伊刀末
仁 都賣流芹子許礼

69 麻須良乎等 於毛敝流母能乎 多知波吉氏 可尔波乃多為
尔 世理曾都美家流

右二首、左大臣讀之云尔。

左大臣葛城王、
後讀持禮也。

(卷二十一・四四五五、五六)

g (すけ)

70 大宮の みかさにぬへる ありますけ ありつゝみれと
ことなきわきもこ

71 すかのねの ねん比いもに こひんかも うらおもふこ、
ろ おもほえぬかも (第六・三九四三、四四)

h (ふぢ)

72 藤なみの かけなるうみの そこきよみ しつむいしをも
花とこそみれ

73 たこのうらの そこさへにほふ 藤波を かさしてゆかん
みぬ人のため (第六・四二三八、三九)

i (なし)

74 紅葉はの にほひはしけし かはあれと まつなしの木を
おいてかさゝん

75 つゆしもの さむきゆふへに たえかねて うつろひにけ
り つまなしの木は (第六・四二六六、六七)

70 王之 御笠尔縫有 在間菅 有管雖看 事無吾妹

71 菅根之 勲妹尔 戀西益 卜思而心 不所念覺

72 藤奈美乃 影成海之 底清美 之都久石乎毛 珠等曾吾見

流

守大伴宿祢家持。

73 多祜乃浦能 底左倍尔保布 藤奈美乎 加射之氏将去 不
見人之為

次官内忌寸繩麻呂。(卷十九・四一九九、〇〇)

74 黄葉之 丹穗日者繁 然鞞 妻梨木乎 手折可佐寒

75 露霜乃 寒夕之 秋風丹 黄葉尔来毛 妻梨之木者

(卷十・二一八八、八九)

j (も、)

76 はるのそのくれないにほふも、のはなしたてるみち
にいてたぢいも

すも、
やかもち

77 我その、すも、のはなかにはにちるはたれのいまた
残りたるかも (第六・四二七、七二)

k ほ、かしは

78 わかせこかさ、けてもたるほ、かしはあたにもにる
かあをきかさには

79 すへらきのとほにみよくはやふせりさけのむとい
ふそのほ、かしは (第六・四三〇五、〇六)

l (うくひす) (あかひと二首)

80 梅のはなさけるおもへにいゑしあればともしくもあ
らす鶯のこゑ

81 打なひき春さりくれば青柳のえたくひもちてうく
ひすなくも (第六・四三八五、八六)

天平勝寶二年三月一日之暮眺、矚春苑桃李花作二首

76 春苑 紅尔保布 桃花 下昭道尔 出立感孀

77 吾園之 李花可 庭尔落 波太礼能未 遺在可母

(但此卷中不稱作者名字 徒録年月所処緑起者、皆大伴宿祢家持裁作歌詞也)

(卷十九・四一三九、四〇)

見攀折保寶業歌二首

78 吾勢故我 捧而持流 保寶我之婆 安多可毛似加 青盖
講師僧惠行。

79 皇神祖之 遠御代三世波 射布折 酒飲等伊布曾 此保寶
我之波 守大伴宿祢家持。 (卷二十・四二〇四、〇五)

80 梅花 開有岳邊尔 家居者 乏毛不有 鶯之音

81 春霞 流共尔 青柳之 枝喙持而 鶯鳴毛
(卷十・一八二〇、二二)

m (ほと、きす)

おはたのひろせ

ほと、きす こゑきくおの、 秋風に あさちさけれや
おとのともしき

小治田廣瀬王霍公鳥歌一首

霍公鳥 音聞小野乃 秋風尔 芽開礼也 聲之乏寸

刀理宣令歌一首

【一四六九は省略——六帖になし】

もの、ふの いはせのもりの 時鳥 今もなかぬか 山の
こかけに

物部乃 石瀬之社乃 霍公鳥 今毛鳴奴香 山之常影尔

【二四七一は省略——第六・四三三七】

82時鳥 きなきとよます うのはなと ともにやこしと と
はまし物を

式部大輔石上堅魚朝臣歌一首

82霍公鳥 来鳴令響 宇乃花能 共也来之登 問麻思物乎

右、神龜五年戊辰、大宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇

病長逝焉。于_レ時、勅使_レ式部大輔石上朝臣堅魚遣_レ

大宰府、弔_レ喪并賜_レ物也其事既畢、驛使及府諸卿

大夫等共登_レ記夷城_二而望遊之日、乃作此歌。

大宰帥大伴卿和歌一首

83橘の はなちるさとの ほと、きす かたらひしつ、 鳴
日しそおほき

83橘之 花散里乃 霍公鳥 片戀為乍 鳴日四首多寸

(第六・四四一四〜一七)

(卷八・一四六八、七〇、七二、七三)

【附記】本稿は、平成二十五年度井上円了記念研究助成の成

果の一部である。